

光の国物語

作：岡崎道成

演出：小川政弘

「神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。」(ローマ4：22～23)

登場人物

ジョゼ・・・・・・・・村の乱暴者。
ラナ・・・・・・・・女の子
レナ・・・・・・・・ラナの妹
老人・・・・・・・・不思議なおじいさん
酒場の主人
船着き場の係員
案内人の男
白い衣の人
ナレーター

<前編>

ジョゼ 「おやじ、酒だ。もっと酒を持ってこい！」
酒場の主人 「やれやれ・・・またか。飲み過ぎだよ、ジョゼ。」
ジョゼ 「おい、聞こえないのか、おやじ。」
主人 「聞こえてるよ。ジョゼ、頼むから大声出さないでくれ。」

N 酒場の主人も手を焼いているこの酔っぱらいは、ジョゼ。この村一番の乱暴者で、いつもお酒を飲んで喧嘩ばかりしている困った男です。

老人 「ジョゼ、ジョゼ。」
ジョゼ 「・・・何でえ。お、じいさん、見かけねえ顔だな。」
老人 「お前は『光の国』に行きたくはないか。」
ジョゼ 「『光の国』？おいじいさん。冗談もほどほどにしるよ。俺が誰だか知ってんのかい。」
老人 「ピレネー村のジョゼ。酔っぱらいの、喧嘩好き。」
ジョゼ 「・・・わっはっはっは。わかってるじゃないか。だったら、俺に『光の国』

の話なんか、するんじゃないよ。」

老人 「あんたは、行きたくはないかね。」

ジョゼ 「・・・うるせえな。俺には関係ないね。第一、俺なんかが行ったって、入れてもらえるもんか。」

N 『光の国』というのは、いつも明るい光におおわれ、そこの人々は誰もが平和で幸せに暮らしているという国でした。でも、それがどこにあるのかというと、山一つ越えればあると言う人もいれば、一生かかってやっと着くと言う人もいるといった調子で、本当は誰も知らないのです。それに、そこに入るにはたくさんのお金が必要だとか、特別立派な人が入れるとか、いろんな噂があるのでした。

老人 「この本を、お前にあげよう。この本を持っていれば、必ず『光の国』に入れる。」

N そう言って、おじいさんはジョゼに小さな、薄い本を手渡しました。

ジョゼ 「・・・何だい、この本は。地図でも描いてあるってのか。」

N ジョゼは、その本をぱらぱらとめくってみました。

ジョゼ 「何だ、何も書いてないじゃないか。じいさん、あんまり人を馬鹿にすると、ただじゃおかないぜ。」

老人 「あわてなさんな。お前はすぐにここを発ちなさい。この本は、お前が困ったときに答えをくれるだろう。よいか。わしの言うことを信じなさい。この本を持っていれば、必ず『光の国』に入れるということをな。(次第にぼやけて消える)」

ジョゼ 「はっ・・・あ、あれ。おい、おやじ。今のじいさんは。」

主人 「じいさん？ ははは、酔っぱらって夢でも見たか。」

ジョゼ 「夢・・・？」

N 寝ぼけ眼をこすろうとしたジョゼの手から、何かが落ちました。

ジョゼ 「あ・・・この本だ。」

N それは紛れもなく、おじいさんに手渡された小さな本でした。

ジョゼ 「お、おやじ。俺、行って来る。」

主人 「ええ？どこへ。」

ジョゼ 「『光の国』。」

主人 「『光の国』って、あんた場所知ってるのか。おい、ジョゼ、ジョゼ！」

N すっかり酔いの覚めたジョゼが酒場を飛び出したのはよかったです、もちろん彼は『光の国』への道など知りませんでした。

ジョゼ 「何だよ、あのじいさん。道がわからなくちゃ行きようがない。やっぱり俺をからかったな。・・・うん？あれは何だ？・・・『光の国』・・・道しるべだ！あっちだったのか。こんなところに道しるべがあったなんて、今までちっとも気づかなかったよ。」

N ジョゼは、初めて見つけたその道しるべの指す方向にまっすぐ進んで行きました。ジョゼの手には、あの小さな本がしっかりと握られていました。

ジョゼ 「夢じゃない。『光の国』だ！この俺が、『光の国』に入れるんだ。」

N 歩き続ける彼の顔は、喜びと興奮でだんだん輝いてきました。途中でいくつか分かれ道がありましたが、その度に道しるべがあったので、ジョゼは迷うことなく歩いて行きました。村を出、野原を過ぎてしばらく歩いていると、大きな川に差し掛かりました。見ると、船着き場に一そうの船が着けてありました。船着き場の入り口には、看板がかかっています。ジョゼは看板に近寄りました。

ジョゼ 「ええと、『光の国』方面行き。乗船前に、審査があります。係員の質問に正直にお答え下さい。審査だって？」

N 見ると、船の入り口では人々が並んで、その審査を受けているようでした。

ジョゼ 「何を聞かれるんだろう。おれのことを知ってる奴がいたら、船に乗せてもらえないかもしれないな。」

N ジョゼは不安になりましたが、ここまで来て引き返すわけにはいきません。彼は列に並ぶと、自分の順番を待ちました。

係員 「はい、次の方。お名前は。」

ジョゼ 「ジ、ジョゼ。」

係員 「どちらの村からですか。」

ジョゼ 「ピレネー村。」

係員 「ではピレネー村のジョゼさん。あなたは、正しい人ですか。」

ジョゼ 「へ？」

係員 「正直にお答え下さい。あなたは、正しい人ですか。」

ジョゼ 「ええと、その・・・」

N ジョゼは答えに詰まりました。自分が酒飲みの乱暴者だということは、誰よりも自分が一番よく知っていましたから。

ジョゼ 「黙っていれば、俺がどんな人間かなんてわからないじゃないか。でも、うそをつくことになる・・・」

N ジョゼの額に脂汗がにじみました。その時、ジョゼはあのおじいさんの言葉を思い出しました。

老人 「(エコー) この本は、お前が困ったときに答えをくれるだろう。」

ジョゼ 「そ、そうだ。本だ。」

N ジョゼはおじいさんに手渡された本を開きました。

ジョゼ 「あ・・・」

N 開いたページは、どこもかしこも真っ黒に塗りつぶされていました。

ジョゼ 「これが、俺の心の中だということか。」

N ジョゼは覚悟を決めて、係員に本を見せました。

ジョゼ 「俺は、正しい人じゃない。俺の心の中は、この本みたいに、真っ黒なんだ。」

係員 「わかりました。では、どうぞこちらへ。」

N 係員はそう言うと、船の方にジョゼを案内しました。

ジョゼ 「船に、乗っていいのか。」
係員 「はい、正直に答えられましたから。では道中お気をつけて。」
ジョゼ 「あ、ああ、どうも。・・・(モノ)この本のお陰だ。本当に答えを教えてくれたんだ。本当に、『光の国』に行けるんだ。」

N ジョゼの顔に、またあの喜びと興奮の輝きが戻ってきました。船の中に、小さな女の子が二人、乗っていました。ジョゼは、なぜかいつもと違う優しい気持ちになって、二人に話しかけました。

ジョゼ 「やあ、俺はジョゼって言うんだ。君たちも船に乗れたんだな。」
ラナ 「うん、あたしはラナ。こっちは妹のレナ。」
レナ 「あたしたち、『光の国』へ行くの。おじいさんから小さな本をもらったのよ。これを持っていると『光の国』に入れるからって。」
ジョゼ 「ああ、それなら俺も持ってる。この本のお陰でこの船に乗れたんだ。」
ラナ 「あたしたちもなの。初めは、黙ってればわからないって思ったんだけど、あたしたち何度も喧嘩したことあるし・・・。」
レナ 「あたし、お母さんに嘘ついて学校をずる休みしたことがある。」
ジョゼ 「そうか・・・。君たちもこの本に助けられて、自分が正しい人じゃないって、正直に言えたんだな。」

N そんな話をしているうちに、船が岸に着きました。3人は岸に上がると、小高い丘の上に登り、道しるべを探しました。

3人 「うわぁ・・・」

N 3人の目の前に広がっていたのは、どこまでも、どこまでも続く深い森でした。その中に入ったら最後、二度と出られないような気がしました。

ジョゼ 「この森を、通るのか・・・」
レナ 「私、怖い。」
ラナ 「大丈夫、きっと抜けられる。あたしたち、この本を持ってるんだもの。」
ジョゼ 「そう、そうだ。この本を持っていれば、きっと『光の国』へ行ける。よし、行くぞ。」

N 3人は、ジョゼを先頭に森の中へ入っていましたが、森の中は薄暗く、どこ

が道なのかよくわかりません。その時でした。

レナ 「きゃ！何これ！？」

ラナ 「あ・・・蛍だ！」

N 一匹の蛍が、3人の周りを回っていたかと思うと、森の中へ向かって飛んで行きました。ラナがとっさに叫びました。

ラナ 「あれが道しるべだわ！ついて行こう！」

N 3人とも、蛍を見失っては大変と懸命に後を追いました。どのくらい歩いたでしょう。暗かった森の中に、次第に光が差し込むようになり、そのうちはっきりと道が見えるようになりました。とうとう、森を抜けたのです。しかし、3人がほっとしたのも束の間のことでした。森を抜けたかと思うと、今度はいばらが道を挟み込むように両側から生い茂っていたのです。

ラナ 「こんなとこ、通れないよ。」

レナ 「通れないね・・・」

ジョゼ 「いや、ちょっとずつ取り払えば進めるかも。」

N ジョゼは、木の枝を振って、いばらを取り払おうとしました。

- ガサツガサツ -

ジョゼ 「いて、いててて！！」

ラナ 「ジョゼ、大丈夫？」

レナ 「ジョゼ、血が出てる！」

N たった2、3回枝を振っただけなのに、ジョゼの腕はいばらの刺で傷だらけになり、真っ赤な血がにじみ出ました。

ジョゼ 「これじゃとてもだめだ。と言って他に道はないし・・・どうしたらいいんだ。」

N 3人は成すすべもなく、ただ呆然とそこに立ちすくんでいました。

< 後編 >

N ジョゼ、ラナ、レナの3人は、これさえ持っていれば『光の国』へ入ることができるという小さな本を、不思議なおじいさんからもらいました。『光の国』を目指す3人の前に立ちはだかったのは、行く手をふさぐように生い茂るいばらの道でした。ジョゼの腕はいばらのとげで傷だらけになり、真っ赤な血がにじみ出ました。

ジョゼ 「これじゃとてもだめだ。と言って他に道はないし・・・どうしたらいいんだ。」

N そのとき、後ろから声がしました。

男 「そこは通れないさ。」

ラナ 「あなた、だあれ。」

レナ 「どこから来たの。」

男 「僕はここを通る人に道案内をしてるんだ。いばらの道を通れなくて引き返す人がたくさんいるからね。他の道を教えてあげるのさ。」

ラナ 「他の道があるの？」

レナ 「あたしたち、『光の国』へ行くの。」

男 「わかってる。ここを通る人はみんなそうさ。さあ、僕に付いておいで。」

ラナ 「そっちの道でも、『光の国』へ行けるの。」

男 「いや、『光の国』へは行けない。君たちはその前に『備えの国』へ行かなくちゃ。」

レナ 「『備えの国』って？」

男 「『光の国』に入る準備をするところさ。君たちはそのままじゃ『光の国』へ入れない。このいばらの道は、正しい人しか通れないんだ。だから、『備えの国』へ行って、『光の国』に入るのにふさわしい人になるように一生懸命努力する。それからここに帰ってくれば、いばらは消えて道が開けるってわけさ。」

ジョゼ 「・・・でも、この本を持っていれば『光の国』へ入れるって言われたんだ。」

ラナ 「あたしたちもよ。」

レナ 「本当よ。」

男 「そんな本一冊で『光の国』に入れるなんて本気で信じてるのか。かわいそうに。『光の国』にふさわしくない人は、入り口で捕まって牢屋行きさ。そして、二度と出られない。」

ラナ 「じゃああたしたちも、その『備えの国』へ行かなくちゃならないの？」

男 「そんなに心配することはないよ。仲間がたくさんいる。みんなで励まし合って、正しい人になれるように一生懸命がんばれば、きっと『光の国』に入れる

ようになるさ。」

N 道案内の男は、3人の顔を見つめました。ジョゼは、この男の言うことを信じていいものか、迷いました。

男 「さあ、僕についておいでよ。仲間がたくさん待ってるよ。」

N そのとき、ジョゼはあのおじいさんの言葉を思い出しました。

老人 「(エコー) この本は、お前が困ったときに答えをくれるだろう。」

ジョゼ 「そ、そうだ、本だ。」

N ジョゼは本を開きました。

3人 「あ・・・」

N 開いたページは、どこもかしこも真っ赤に塗りつぶされていました。それはまるで、さっきジョゼの腕からにじみでた血の色のようでした。

レナ 「ねえ、これどういうこと？このいばらの道を通れってということ？」

ジョゼ 「たとえ血を流しても通れってことか・・・」

男 「おいおい、本気で言ってるのかい。こんなすごいいばらの中を通れるわけがないだろ。」

ラナ 「ううん、きっと大丈夫よ。船の時も、この本を信じて船に乗れた。」

ジョゼ 「・・・そうだな、そうだよ。よし、最初は、俺が行く。」

ラナ 「ううん、あたし行く。」

レナ 「あたしも、ラナと行く。」

ジョゼ 「じゃあ3人で一斉に行こう。いいか。」

N ジョゼの言葉に、ラナとレナが頷きました。意を決した3人が、今にもいばらの中に飛び込もうとしたそのときでした。

男 「(わああああ！)」

N 後ろで叫び声がしました。3人が思わず振り向くと、森の中から、大きな獣が

こっちに近づいて来るのが見えました。ライオンでした。神々しいほどに真っ白なそのライオンは、男には見向きもせず、3人の方に向かって近づいてきます。3人はじりじりと後ずさりしました。いばらが背中に当たりました。その瞬間、ライオンは3人に向かって飛びかかりました。

3人 「きゃー！！！」「うわー！！！」

N 頭を抱えてうずくまった3人の頭の上を、ライオンが飛び越えました。バリバリっと恐ろしい音がしたかと思うと、ライオンはいばらの中に飛び込み、そのままいばらを蹴散らしながらどンドン前を進んで行きました。そしてライオンは、やがて見えなくなりました。いばらの中に、ライオンの通った後がぼっかりと空きました。

ラナ 「道があいたわ、ジョゼ。」

ジョゼ 「あ、ああ。」

N 3人は、ライオンが空けていったいばらの道を、前に進みました。誰も口を開きませんでした。しばらく歩いていばらの道の出口が見えてくると、3人は足を速めました。みんな気持ちは同じでした。ライオンがどうなったのか、知りたかったのです。いばらの道を出ると、そこには血だらけになったライオンがうずくまっていました。その白い大きな体には数え切れないほどのとげがささり、肉は切り裂かれ、体中から真っ赤な血が流れていました。3人はそれを見ると、ライオンに駆け寄りました。でも、ライオンはもう、ぴくりとも動きませんでした。

レナ 「ライオンさん、死んじゃった・・・」

ラナ 「あたしたちのために、道を空けてくれた・・・」

ジョゼ 「こんなに血を流して・・・あの真っ赤なページは、このライオンの血だったのかな。」

- ラナとレナ、次第に声をあげて泣く。

ジョゼ 「さあ、行こう。」

ラナ 「さようなら、ライオンさん。」

レナ 「さようなら。」

N ラナもレナも、名残惜しそうに何度も後ろを振り返っていました。 いばらの

道を過ぎた後は、一本道になっていて、道の向こうが明るく輝いていました。3人は駆け出しました。駆けに駆けて、とうとう、3人は『光の国』の入り口にたどり着いたのです。

N 『光の国』の入り口は広い階段になっていて、その先には見上げるような高さの白い柱が、何本も立ち並んでいました。そして、柱の間から外に漏れる光は、ただでさえ明るいこちら側をさらに眩しく照らしていました。

ジョゼ 「着いた・・・」

レナ 「・・・眩しいね。」

ラナ 「うん、ほんとに『光の国』なんだね。」

N ラナとレナが階段を駆け上がりました。ジョゼも、ゆっくりと階段を上って行きました。真ん中の柱の間に、白い衣を着た人が立っています。3人が前に進み出ると、その人は言いました。

白衣の人 「心の清き者のみ、この国に入ることを許される。お前たちの心の中を見せよ。偽ることはできぬ。偽り者はここから永久に放り出されるであろう。」

ジョゼ 「心の中を見せる？ どうやって？」

ラナ 「ジョゼ、きっとあの本のことよ。」

レナ 「でも、あたしたち真っ黒だったんだよ、船に乗るとき見たじゃない。」

ジョゼ 「そうだな、真っ黒だった。でも、次に開いたときは真っ赤だった。この本に助けられてここまで来たんだ。見せるしかない。」

N 3人は、自分の持っていた小さな本を白衣の人に渡しました。彼は本を受け取ると、順々にそれを開いて中を確かめた後、3人に返しました。

白衣の人 「よろしい。ジョゼ、ラナ、レナ、3人ともこの国に迎え入れる。さあ、進むがよい。」

N その言葉に、3人ともすぐに自分の本を開きました。

ラナ 「白い・・・真っ白だよ。」

レナ 「あたしのも。ねえ、真っ白だよ。」

N 3人の本は、どのページも雪のように真っ白でした。

老人 「やっと来たな、ジョゼ。ラナ、レナも一緒だったんじゃない。」

N 気がつく、あの、本をくれたおじいさんがそこに立っていました。そして、いばらの道を通って死んだはずのライオンも一緒でした。

ラナ 「ライオンさん、生きてたの。」
レナ 「ライオンさん、よかった。」
ジョゼ 「じいさん、あんた、この人だったのか。」

N おじいさんは、微笑みながら3人を見つめました。ジョゼがおじいさんに言いました。

ジョゼ 「じいさん、一つ教えてくれよ。ここに入ることができるのは、正しい人だけなんだろう。船に乗るときは、俺たちの心は真っ黒だったんじゃないのか。」

老人 「その通り。だが、いばらの道を通ると、その痛みや、流した血がその人の心を真っ白にしてくれる。お前たちは確かに、あのいばらの道を通ってきたのだろう。」

ジョゼ 「・・・でも、自分で通ったんじゃない。俺は痛みもしなかったし、血も流さなかった。」

ラナ 「ライオンさんが、道を空けてくれたの。」
レナ 「いっぱい血を流したのよ。とっても痛そうだった。」

老人 「あの痛みを耐えて通れる者は誰もいない。ライオンだけが、お前たちの代わりに痛みを全部引き受けることができる。大切なのは、信じることじゃ。」

レナ 「信じること？」
老人 「そうじゃ。どんな努力も、心を白くするには十分ではない。お前たちは、この本を持っていれば『光の国』に入れるというわしの言葉を信じた。だから、このライオンが受けた痛みや流した血が、信じたお前たちの心を真っ白にすることができたんじゃない。」

ジョゼ 「・・・そうだったのか。」

ラナ 「おじいさん、本をありがとう。」
レナ 「本をありがとう。」

老人 「さあ、もう一度本を開けて、中へお入り。お前たちの場所は、ちゃんと用意してある。」

N 3人は小さな本を開けました。本は、どのページも金のように光り輝いていま

した。すると、どうでしょう。その時、本が3人の手から消えたと思った瞬間、目の前には、本当にキラキラ輝く、光に満ちた光景が現れたのです。ジョゼ、ラナ、レナの3人は、おじいさんとライオンに導かれて、ゆっくりと吸い込まれて行きました。目映いばかりの光の中へ。

N あなたも、この小さな本をお持ちですか。それは聖書。そして、神様からの最高のプレゼント、イエス・キリスト。このお方を心に迎え、一緒に『光の国』でお会いしませんか。

< 完 >

参考文献

C . S . ルイス「ライオンと魔女」

ジョン・バニヤン「天路歷程」

作者不明「字のない絵本」